

タクシーは堀川通りを西陣に向かって北上していた。前を行く車の尾灯が目につき出す時間である。年配のドライバーが初めて気がついたように嘆声を発した。

「うエッ！ これは凄えや」

夕焼けのことだった。暮れなずむ天空に縹雲ならぬかき餅大の片雲が縦に黒く並び、その底だけがどす赤く輝いていた。

「嫌な赤ね。お稲荷さんの鳥居を敷き詰めたみたいで気味悪いわ」

「なるほど、お稲荷さんの鳥居ね。お客さん、うまいこと言わはりますな」

確かにこの世の終わりを思わせる嫌な濃さだった。

京都は、西に阪神の工業地帯を控えているせいで美しい茜の夕陽が見られる。しかし、

この濃さは異常だった。何のせいだろう。

坂戸初子は、会いに行く男のことを思っていた。

着物評論家としてその筋では名前も顔も通った男である。年も五十を回ったところで、鮪で言えば脂ののりきった大トロだった。

初子の京都通いが多くなったのには、彼の引力がかなりあった。今回の滞在が延びているのも彼への未練が絡んでいる。男の名は美杉春彦と聞いた。

男は何時もの宿で盃を傾けながら待っていた。

「済みませんな、お忙しいところを呼び出しといて、その上、えろう待たしてしもうて」

そんな言い方をする男だった。呼び出したのは初子の方である。最初はそんな美杉の皮肉な言い方にひどく傷ついた初子だったが、軀の馴れと共に今ではもう馴れっこになっている。それどころか、

「どう致しまして、気にせんといて」

と切り返すタイミングも覚えた。

「ま、そない怖い顔せんと一杯いこ」

「あら、わたし怖い顔してて。そちらに思い当たる節があるからと違いますか」

そんな話になるのは、最近、美杉が祇園の舞妓に入れ揚げているという専らの評判だからだ。

「世間でほんまに困ったもんや、有ること無いことうまいこと作り上げよる……」

「有ること有ることと違いますの？」

「下手な京都弁はやめとき、酒がまずうなる。……第一、そないな浮いた話が事実なら、電話一本でこんなとこまで出て来ますか？ さ一杯注いでえな」

こうやって何時の間にか彼のペースに巻き込まれてしまう初子である。

初子には夫に悪いという気持ちはなかった。彼女に言わせれば、夫婦を夫婦でなくしたのは耕之輔である。

耕之輔が密かに子供をつくることを拒否していることを知った時、初子は氷の水を頭からぶっ掛けられた思いがした。新婚当初、当分はふたりの生活を楽してみたいと言いつたのは初子だったが、それはあくまで当分のことで、いずれは子供が欲しかったし、浅谷窯の後継者も必要だった。

もう一つ、初子には夫がそれを密かに企んでいたことが許せなかった。理由を訊いてもハッキリしない。耕之輔のあげる、これからの地球では親も責任を持ってない、といった理由は彼の勝手から出ているとしか思えない。

それでも何とかやって来れたのは先代耕之輔の存在であった。世間的にも認められ、人々も坂戸の嫁として遇してくれる。

そのうち、耕之輔が先代の実子でないらしいことが実家の方から入ってきた。初子のシヨックは予想以上に大きかった。先代を畏敬していただけに、血の繋がりが無いことは大きく響いたのかも知れない。

耕之輔は初めて全てを明かしたが、理屈では分かっても、初子の感情は元には戻らなかった。

決定的になったのは先代耕之輔が亡くなってからである。以前から理解に苦しむような塊を作り始めていた夫は、先代の重石が取れると羽を伸ばしてこれに取り組み出した。

初子には狂気の沙汰としか思えない耕之輔の塊は予想通り不評だった。長い間、窯の経理を見てきた初子には許せない所業であった。

その頃から、夫婦らしい感情も営みもなくなった。

「こないに京に長居してて、御乱心の殿は何も言うて来はらへんのかい」  
美杉が盃を傾けながら言う。

「御乱心の殿」は初子が言い出したことだった。耕之輔の作品を顧客先に見せる時、相手の機先を制して使うのである。

「芸術もええけど、あんたさんも苦労しやりますな」

そんな中には初子に同情して買ってってくれる顧客もいる。そんな時、よく付録に食事の誘いがついた。

「一度、祇園辺りで一緒にお食事させて貰えしまへんやろか。一寸いける店おますねん」

食事をする、又一つ売れた。時には友人を紹介したり、業者に渡りをつけてくれたりする者も出てくる。

美杉春彦もそうして知った一人だった。

初子に美杉を紹介したのは、先代からの顧客中田だった。

「その筋に顔は広いし、目も利くお人です。一度、当代のお作、見て貰わはったら如何です？」

と、初子のために一席設けてくれたのが最初だった。

美杉は耕之輔の茶碗を見るなり大きく笑った。

「これは見事な茶せん泣かせですな。ここまで徹すれば大したもんだ。これを売るとなると大変でしょう。特に京都の人は、繊細でないとあかるところがありますから」

そう言いながら、しきりに茶碗を弄んだ。

「それにしても先代さんとはえらい違いですな」

「本人は、自分らしい物を作りたいと言うのですけど」

「気持ちわかります。伝統窯の先生方が皆さんお抱えになつとる悩みですわ明らかを紹介した中田の見込み違いであった。

「お忙しい先生に時間割いて頂き申しわけありません」

中田は恐縮したが、美杉は茶碗を弄びながら、初子に向かって言った。

「水指はお持ちになつてないんですか」

「宿には持って来ておりますけど」

「水指を拝見しとおすな。この造りでは水指は面白いんと違いますか」

「そうでしょか」

「水指に茶せんは使わんから大丈夫でしょう」

と笑った。

「見てやって頂きますでしょうか」

「拝見しましょう。明日にでも早速……」

「有り難うございます」

翌日、指定されたお茶屋に出向くと、美杉は今日のように、ひとりで飲みながら待っていた。

「奥さん、昨日の茶碗三つとも預からせて貰いますよ。昨夜、帰りの車で思い出したんです。ああいう変つたのが好きな男がいる。私が言えば、三つとも必ず買います。ほな、水指、拝見しまひよか」

水指も含めて四つも話がまとまるのは希有なことだった。その夜、初子はかなり酔った。ほっとした気分と感謝の中で美杉に唇を許していた。

「昨夜お会いしたばかりなのに……私、そんな女ではありません」

そう言った気もするし、思っただけで声にならなかった気もする。久しく渴いてきた女には酔いの中で甘美な唇の記憶だけが残った。

一度流れ出すとあとは美杉の思いのままだった。

先夜、中田に初子を紹介され、鬼手の茶碗を引き受けた時から美杉の計画は既にスタートしていた。

それは、木守りに一つ残った熟柿を見れば誰でも採って食べたくなるのに似ている。美杉のような練達の男から見れば、初子は手間の掛からぬ相手だった。

「最初御挨拶した時からこの胸にピンとくるものがありましたん。……私は奥さんみたいなお人に弱いんです。奥さんみたいなお方が困ってるの、黙って見てられん性分ですねん」

耳元に熱い息を吹き込んでくる。

「いけません。困ります……」

抗いながら、力が抜けていくのに時間はかからなかった。全ては美杉の計算通りだった。美杉の生業を一口で説明するのは難しい。肩書きは服飾評論家で、頼まれれば雑誌などに寄稿もするが、それは表看板で、実際の仕事は顧客たちの筆筒の中身の管理と補充にあるのだ。

顧客から電話がかかってくる。

「明日、北山で茶会ですの。着物はこの間作ってくれはった渋茶のあれにしようと思うのどすけど帯はどれにしましよ。雨でしたらどないしましよ」

そんな相談が持ち込まれる。これに適切なアドバイスを与える。その筆筒の中身は殆ど彼が納めた品なのだ。といって、彼は呉服屋でも染屋でもない。あちこちの間屋や呉服屋の情報を持っていて、顧客の需要や好みに合うものを探し出しては納めるのだ。時には産地に出掛け、顧客に合わせて一品ものをみつくることもある。

そうしたセンスでは彼は抜群の才能を持ち、信用されていた。娘の嫁入道具一式の相談に乗ることもあり、家具調度一切、筆筒から下駄箱まで任されることもあった。つまり売り手と買い手の間に入って双方の利益を計る和服コンサルタントなのだ。こんな商売は恐らく京都でしか成立しないだろう。しかし、こうした商売を考え出し成立させたのも彼だった。耕之輔の鬼手の茶碗の二つや三つ、何処へでも納められる力を持っている。それもかなりの口銭を乗せてだ。商売の一つである。

こんな才能を持つ彼に、初子など赤子の手をひねる様なものだった。

間違いを起こしても、初子には夫に対しての罪悪感はなかった。美杉は女盛りの渴きを癒すには格好の男だった。

「ね、私たちどうなるの」

ことこの後の虚脱した頭で訊いてみる。

「それはあんた次第や。けど、何もそう急いで決めることもないんとかうか。旦那はともかく、先代のお蔭で、浅谷窯はまだまだ通用しよる。あんたかてその若奥さんで充分通るのや。あんたが旦那の品を萩から運んでくれば、私が京都で適当にさばいてあげる。それでお互いええんと違うか」

「初めからそういうつもりだったのね」

「何でそう、一々コトをはつきりさせないかんのや」

そんな会話が何度繰り返されたことだろう。

二人の逢瀬は、初子が京都に来るたびに続いてもう半年を越していた。

決して美杉が好きなのではなかった。それは初子にも分かっている。彼の見せる皮肉っぽい物腰が初子には何とも我慢ならない時がある。

昨日も宗匠の手伝いで出掛けた茶会で顔を合わす羽目になった。三日前に濡れたばかりである。

「坂戸先生の若奥様。お久しぶりでございます。この度はいつ御上洛でした？」

人前でわざとぬけぬけと挨拶してくる。

「人前で困らせるのが趣味なのね」

「あんたの困った顔には何とも言えん色気がある」

「悪い趣味なこと。女なんて一度寝ればどうにでもなると思ってるんでしよう」

「またそうムキになる。会ってる時くらい楽しく出来んもんかいな」

「私だって楽しく会いたいわ。そう思うんだったら、電話した時、どうして居留守なんか使うのよ」

「男には仕事があるのや。分かって貰えんかなあ」

急に甘えた口調で訴えながら、覆いかぶさるようにしてくる。

「そんなことでごまかしても駄目」

言いながら、指の赴く先を読んで、軀は勝手に反応し始める。墮ちる快楽を最も強く意識する一瞬だった。

初子は自分への言い訳をいくつも用意していた。

初子は若い頃から大き過ぎる軀をもて余してきた。母親からよく「また背中を曲げている」と叱られたものだ。中年にさしかかりその大柄に脂肪がついてきた。それでも太った感じがしないのは、上背があるからだろう。

横に寝ている美杉が小柄なだけに自分がより大きく見えて嫌だった。寝ていると思った美杉が突然軀を起こした。

「帰るの？」

「もう堪忍してえな」

「私も帰ろうかしら。朝ひとりで出るの嫌だわ」

美杉は背中を見せてシャツを頭から被っていたが、その格好がいかにも爺むさい。「帰ろうっと！」

跳ね起きると素っ裸だった。大きな躯が更に大きく見える。

「色気のないことや。情緒もへったくれもあつたもんやない」

「私から色気を吸い取ってるの誰かしら？」

「俺は色気つけてあげてるのや。吸い取ってるのは旦那の方とちがうか」

「そ、そうかも知れないわね」

「それにしても分からんなあ。こないに日延べしても旦那何にも思わんのやろか」

「私たちがもう夫婦じゃないのよ」

生臭さが強く匂うのはこういう時である。

「萩へは何時帰るつもりや？」

「帰って欲しいの？」

「そんなこと言うてへん。一寸着せてみたい紬があるねん」

「そらおおきに……」

美杉は手帳を覗き込んでいた。

「明後日の二時、どうや。四条河原町の例の喫茶店で待ち合わせて。けど時間はないで。

……後を期待されたら困るよって言うとかけど」

「その一言が多いのと違う？」

「そやったな、反省！」

美杉はテレビで見る猿の真似をしてみせる。それが如何にも似ていた。思わず吹き出しながら、初子の胸を冷たい風が抜けて行く。

帰りは車を二台呼んで貰って別々に帰るのが習いとなっていた。初子は美杉を見送ってから車に乗った。

京都の夜は黒いと思う。暗いのではなく黒いのだ。それも青墨ではなく茶墨の黒さだった。

車の尾灯が響く夜をひとり宿に帰る間、初子はいつも明日のない虚しさを覚えた。今夜は特にそれが強かった。

吉井勇の「京の夜や遊びの後の虚しさを語るが如き宗達の幅」という歌が思い出される。宿は先代からの馴染みの日本旅館で、高台寺道にある。遅い時には裏木戸から勝手に入る約束になっていた。

手探りするほどの暗い廊下を足を忍ばせて部屋に入り、明りを点けると、緋の蒲団がまぶしかった。

着替えるのさえ大儀だった。鏡の中に少し着痩せした女が映っている。女の目の下に黒い隈が目立った。

明日萩へ帰ろうか、とふと思う。美杉には電話で断わればいい。

そんなことを思いながら、美杉が見立ててくれるという紬を確かめてみたい気もある。美杉には以前一度、付下げを仕立てて貰っていた。生地から彼の見立てでその上に彼の探してきた絵を染めて貰ったのだが、さすがに垢抜けしていて人目を惹いた。今度の紬も彼の見立てなら相当な物に違いない。

その日、初子は新幹線の予約を取り、約束の喫茶店「築地」に出掛けた。

美杉は十分ほど遅れてやって来た。彼が連れて行ったのは、裏通りの一品物だけを扱う間口の狭い問屋である。

奥に通され、煎茶を一口すると、美杉が言った。

「例の奴、見せて貰えますやろか」

「やはりあれですか。美杉先生、必ず来はると、家内とも言うてましたんや」

先日還暦を迎えたという坊主頭の主人は、奥から太目の反物を運んで来た。

「これだけの品は近頃とんと目にしません。若い作者らしおすけど、ええ仕事してはりますわ」

錆びた代赭色の手織り紬だった。

「まあ、素敵な織り！」

初子もお世辞でなく、思わず声を上げた。

「小千谷の藤波阿紀というお人どす」

「藤波あきさん。何だか聞いたような気がするわ」

初子が言うのに、美杉は、

「むかし、藤原あきさんというお人がいた。その人と間違えていなさるんと違いますか」

と他人行儀な言い方をした。初子はその人は知らなかった。

「いやはりましたな、歌うたいの奥さんで。……けど奥さんの勘違いですわ。私ら玄人が知らんくらいのお方ですから……」

主人はプライドを傷つけられたような言い方をした。しかし、確かにどこかで聞いた名前だ。気になったが思い出せない。

「奥さんにびったりと思うてお供させて頂きましたんですけど、如何どす？ 気にいって貰えましたか」

「……素敵だわ」

「そらよろしおした。これで決まりでんな」

「きつと奥様に御縁がありましたんや。これだけの紬は今どきそうお目に掛かれるもんやおへん」

「けど、お高いんでしょ？」

「天下の浅谷窯の若奥さまが何おっしゃいます。先代のお茶碗なら一つにも当たりません。

後はこの美杉めにお任せ下さい。おいでにならんから言うのやけど、ここのご主人はそりや気前のええお人ですねん」

「それはどうでっしゃろ。認識不足と違いますか」

美杉と主人の軽いやりとりを聞きながら、初子の中に変に沈んでいくものがあつた。

この着物が着られるのは嬉しい。買ってくれるという美杉の気持ちはもっと嬉しくていいはずだ。それが芯から喜べないのは何故だろう。分かっていたが初子は答えから目を逸らしていた。

初子が藤波あきという名前を思い出したのは下関に向かう新幹線の中だった。

「あ、あの人だ」

先代が着ていた上布を織った人が確か、藤波あきと言つた。初子はその話を先代から新幹線の車中で聞いた覚えがある。

「じゃその方、お義父さまの初恋の人なんですね」

「初恋かどうかは分からんが……」

そんな会話を交わしたのを思い出す。あの人も確か小千谷だと聞いた。

あの人たちは知つたかぶりの顔をしているが何も知りはないのだ。私の方がよく知っている。あの藤波あきさんだとすると大変な品を手にいれたことになる。冷えていた初子の胸に、誇らし気なものが湧いていた。

初子が最終便で長門市駅に着いたのは十一時近かつた。

初子は駅から十分余りの道を実家へと歩き出した。田舎の街は眠っていた。起きているのは薄暗い街灯と海からの風だけだ。角を曲がると時計屋夫婦が協力して表を閉めている。駅から電話すれば、久美子に迎えに行かせたのに」

母の正枝が寝巻きに上つ張りをひっかけながら、勝手口から入って来た娘を迎えた。

初子は炬燵に両肩まで突っ込んで座つたが、点けたばかりの炬燵は身にしみる。

「清水は迎えに来んのかい」

「いいの。今晚はここに泊めて。明日一番で帰るから」

「うちは構わんけど……耕之輔さん待つとるんじゃないのかい」

「急に決めたから、電話してないの」

「変な夫婦……どういふんだらうね、あんた達」

炬燵が溶けるように暖まつてきた。

声を聞き付けたのか、久美子が二階からおりて来た。

「やっぱりそうか。……お帰り！」

大柄な姉妹が炬燵に並ぶと正枝はますます小さく、鳥がらのようだった。

「京都は楽しかつた？」

「何ばかなこと言つてるの。姉ちゃん遊びに行つてるんじゃないわよ」



「あらそう。あんまり遅いから、楽しすぎて帰るの忘れたのかと思った」

正枝が茶を汲みに台所に立つと、初子が訊いた。

「窯場の方、変りなかったみたい？」

「さあ、私お義兄さんの監視してるわけじゃないもの。でも心配はしてたみたい。姉さん、電話一本掛けてこないでしょ」

「ちゃんと清水君には連絡してるわよ」

「清水君にじゃ仕様がなしでしょ。それも三日に一回くらいじゃ」

「……随分詳しいのね久美子」

「詳しいわよ、私」

「……あなたに何が分かるの!？」

初子の顔から血が引いていた。

「分かりもしない者がいい加減なこと言うんじゃないの！ 可哀想なのはどっちよ」

「ご自分の方が可哀想って言いたいわけ？」

「だからなんにも分かってないって言うのよ」

正枝が台所から慌てて戻って来た。

「大きな声してッ。お父さんが起きて来るじゃないの。姉ちゃんは疲れ果てて帰って来るのよ」

「そうかしら……」

「久美子それどういふことよ」

「おやすみなさい」

先に矛を納めたのは久美子の方だった。

「あの子、うちの先生に惚れちゃったのかしら」

「馬鹿なこと言わんといて頂戴。あの子も心配してるのよ、あんたのこと。……ね、京都で何かあったの？ それとも……」

「忙しかっただけよ。でも……もういい加減嫌になった。なんで私だけこんなに苦勞しなきゃならないの……」

「分かるよ」

初子は答える代わりに大きな溜め息をついた。

「……それで幾らかは捌けたの？」

「あんな物でも捌かなきゃ仕方ないでしょ、浅谷窯は窯元なんだもの」

「先代もいけないんだよ。どうしてあんな人を跡目に認めたんだか。私は近頃、先代が憎らしくなってきたよ」

「でも、私は頑張るわよ。あの人はあの人……私は私。このまま、浅谷窯を出たら、今までの苦勞が水の泡だもの」

「お父さんもそれを言ってるのよ。初子には可哀想だけど、ここは辛抱して貰って、窯ごと何とかするしかないって」

「何とかって……？」

「お父さんのことだもの、大きなこと考えていなさるんじゃないの」

急須の口から番茶が音を立てて落ちるのを初子は他人ごとのような目でぼんやりと眺めた。

「蒲団は久美子の部屋の隣でいいね」

「自分で敷くからいい。もう少し暖まって寝るから母さん先に休んで頂戴」

正枝が立ち去ると、初子は炬燵にうつ伏した。長旅のせいかわ節々が気だるい。先刻、久美子が去る時の変に自信あり気な目が気になった。あの目は女の目だと思う。

何か京都のことを掴まれたのだろうか。

二階に上がり、蒲団を出して敷いていると、隣の久美子の寝返りを打つ気配があった。

「起きてるの？」

声を掛けたが返事はない。

「あなたには姉ちゃん之苦労なんかまるで分かっていないのね」

やはり返事はなかった。

「聞いてるの？ 聞いてないの？」

「もういいわよ」

初めて返事が返って来た。

「久美子の言い方だと、まるで私は京都に遊びに行ってるみたいね。そう思ってるの？」

「……」

返事はなかったが、言いたいことを我慢しているのが襖越しにも分かった。

もし、久美子が掴んだとしたら何だろう。高台寺道の宿の電話番号は久美子も知っている。夜遅くに、何度も電話したのだろうか。それなら宿の人が何か言う筈だ。まさか探偵社を頼んで調べたわけではあるまい。

蒲団は敷いたが寝巻きがなかった。初子は上の物だけを脱いで滑り込んだが、とても眠れそうもなかった。

京都では気に掛からなかったことが、長門に帰ると気に掛かる。建て前だけでも理由を述べなければなるまい。変につくると却って嘘に聞こえそうで恐かった。

思案しながら次第に面倒臭くなってゆく。ひと思いに何もかも吐き出してしまいたかった。全てを清算出来たらどんなに楽になるだろう。

朝、目を覚ますと七時前だった。初子はまず浅谷窯に電話した。一番にしないと益々掛けにくくなりそうな気がしていた。三つ鳴って出た。

「清水君？ 今、服部の家まで帰って来てるの。車で迎えに来てくれる」

「……ああ、行かせる」

意外にも耕之輔の声だった。それだけでどちらからもなく電話は切れた。

こんな時間に耕之輔が仕事場に居るなど考えてもみないことだった。留守の間に何かが変わっている。

清水が車で迎えに来たのは、それから三十分ほどしてからだった。

「お帰りなさい」

その言い方が素っ気なく聞こえるのは気のせいだろうか。初子はバックミラーに清水の顔を窺っていた。

「長いこと留守したけど、寮場の方変りなかった？」

「はい」

「先生も変わりなかった……？」

「はい」

取り付く島がなく、初子はムツとした。

「今朝は先生、随分早かったのね。何か急ぎの注文でもあったの？」

「いいえ。近頃ずつとお早いです」

「清水君も床屋さんに行かなきゃね」

返事はない。自分が遠慮することはないのだ。あんな鬼手の茶碗に家元の箱書を貰い、

その大方を捌いてきたではないか。なのにその態度は何よ！

こんな時、初子は自分を優位に立たせるための箇条書きを持っている。

夫は子供を作ることを拒否してきた。夫には生活能力も向上の意欲もなく、性格破綻者だ。どれ一つとっても、夫は私の夫である資格を欠く欠陥者なのだ。

初子が入って行った時、耕之輔は仕事場の整理をしていた。

「ただいま！ 遅くなりました」

初子は入口に立ってわざと元気な声を出した。

「ああ、お帰り……御苦労さん」

棚板を持って踏み台に乗っていた耕之輔は一寸振り返るように半身になった。仕事場は、汲み出しの数物が整然と列を作っていた。何かが違う。出掛ける前と「おや」という程の変り方であった。整理しなければと言いつつ続けてきたのは初子の方だ。その点喜ぶべき傾向だったが、初子はこの空気の違いにただならぬ気配を感じた。

住まいに戻るとここも何か変わっている。掃除が行き届いていた。キッチンも整然としている。

初子はハッキリと、そこに久美子の影を見ていた。

「あの子、ずつと来ていたんだわ」

食堂へ行くと清水がひとりで食卓に向っていた。

「清水君、朝御飯まだだったの。悪かったわね」

「いえ、……奥さんは？」

「私はいいの、服部で済ませてきたから。……久美子、留守の間ずっと来ていたのね」

「いえ。どうしてですか」

「じゃ貴方たちで掃除したの？」

「そうです。先生と相談して決めたんです。交替でやるように」

「へえ、そう……いい傾向ね」

ガス台に薬缶を掛けようとして、流し台の前にハンドクリームを見付けた。見覚えのある久美子のものだ。

「清水君、久美子は来てないと言わなかった？」

「二、三度は来られました」

「食事を作って行ったのね」

「食べても行かれました。……ああ、食事も交替でやることに決まりました」

「決まりましたって、先生もするの？」

「そうです。今朝のこれは先生の当番です」

「先生に作らせて、貴方よく喉を通るわね」

「感謝してます」

「随分当て付けがましいやり方ね。誰が言い出したの？」

「食事してて何となく……三人で決めたというか、決まったというか……」

「三人？ 久美子も来てたんじゃないの」

清水は漬物を歯切れよく噛んで黙っている。

初子は弾き出されている自分を感じていた。

自分が異物になっている。京都に発つまでは耕之輔の方が異物だった。それにしても、何時どういう風の吹き回しでこんなに変ったのか。

「気にしない、気にしない」

口の中でつぶやいてみる。

耕之輔が頭の手拭いを取りながら入って来た。

「どうだ。今日の味噌汁は？」

耕之輔の言葉は清水に向けられたものだった。

「うまいですよ。明日も葱と豆腐にしましょうか」

「いいよ、お前の好きなもんで」

耕之輔は椅子を引いて腰掛けた。初子はお茶を注いでやった。残ったので清水にも注いでやる。

「京都に運んだもの、六割方は捌けました」

初子はやっと言葉を見つけて口にした。

「それは御苦労さん」

「この前に運んでおいた水指も売れたわ」

「先生のあの味が本当に分かる奴、京都辺りにいるのかなあ」

清水が生意気なことを言った。今までなら初子は弟子のそんな発言を許さなかった。耕之輔との間は別にして、けじめはつける方である。それが今は素直に口に出なかった。

「分かるみたいよ。評判よかったわ」

それは美杉が引き受けてくれた鬼手の水指だった。

「それより、家の中、随分片付きましたのね」

「ああ、久美ちゃんがよくやってくれて……」

「あの子、自分の部屋は散らかしっ放しのくせに……毎日来てたんですか」

清水が顔を上げて耕之輔に目配せした。

「毎日というわけでもないが、よく掃除してくれた。裏の物置も整理してくれた」

「嫌だわ。あの子、あんな所まで覗いて行ったの」

清水が箸を置いて掌を合わせた。

「御馳走さまでした」

「どう致しまして」

耕之輔が照れて笑った。初子は夫のこんな顔を久し振りに見た気がする。

「貴方が台所に立つなんてどういう風の吹き回し？」

耕之輔は両手に自作の茶碗を包んで苦笑している。

「捨てたものじゃないんだ、俺の料理……」

「そうなの？」

しなをつくって清水に訊いてみる。

「……ま、そういうことにおきましよう」

「この野郎……覚えておけ」

久し振りに聞く家庭らしい会話だった。

それにしても京都の帰りが遅れたことを二人とも口にしない。

初子は格好な話題を探し出した。

「京都の町を歩いていて見かけたんだけど、お義父さんの形見の上布、あれを織った人、藤波あきさんって言わなかった？」

耕之輔は突然出た阿紀の名前に思わず妻を見ていた。清水の手も止まっている。

「藤波あきさん……!?……そ、それがどうした」

「確か先代そうおっしゃったと思うの。……その人の袖見たのよ、呉服屋のショーウインドーで」

「何処の店だ。いや、あの人の物があれば前から欲しいと思ってたんだ」

「残念、女物よ」

清水は探る目で初子を見ている。初子が何かを感じて言っているとしたら凄く勘である。

「確か小千谷の人だっておっしゃってたわね」

「そうだったかな」

耕之輔の頭はしどろもどろだ。

「しかしその人、まだ存命なんですか？」

清水が助け船を出した。耕之輔の顔色が変わっているのを初子に覺られては困る。

清水は、初子に阿紀が来たことを喋ったとしたら久美子だと確信した。初子はそのことで探りを入れているに違いない。そうでなければ、ここで藤波阿紀の名前など出てくる筈がないと思う。しかし、耕之輔は全く気がついていなかった。

「その紬どんな柄だった？」

「それが丁度私が着ていくくらいの渋茶の草木染なの」

「買ったのか？」

「……!？」

もう仕立てに出ているとはさすがに初子も言えない。ふと美杉の顔が浮かんで消えた。

「先生、今日はどっちの土を用意しますか」

清水は耕之輔がボロを出す前に早くここから連れ出したかった。

「直ぐに行く」

「待ってますから、なるべく早く来て下さい」

清水は不安を残しながら出て行った。

初子は、ふたりだけになると、耕之輔が相手なら京都でのことも何とかごまかせる自信があった。

「一日延ばしに遅くなって、御免なさい。何とか半分は捌かしたいと決心して出掛けたものだからつい延びて……でもお蔭でどうにか六割方は捌けたわ」

耕之輔は黙ってお茶をすすっていたが、吐き出すように言った。

「その捌かすって言い方は止めてくれないか。俺はゴミを作ってるわけじゃないんだ！」  
絞り出す言い方だった。

しかし、この怒りが耕之輔を立ち上がらせ、初子を逆に安堵させた。

捌くという言葉が耕之輔をどんなに傷つけることかなど、元々頓着しない女なのだ。商品きざを捌くのは商人として当然のことだった。

初子は流しへ行くと、冷たい水を思い切りよく飲み干した。

疑われてはいない。少なくとも証拠は握られていない。

居間へ行くと障子を開けたまま着替え始めていた。

電話が鳴ったのはそんな時だった。

「はい、坂戸耕之輔でございます」

初子の声は明るい営業用に変っていた。

電話の向こうに息を呑む気配があった。

「もしもし……坂戸でございます。浅谷窯の坂戸でございます」

念を押すと一拍あつて女の声が出た。

「間違えました。失礼致しました」

間違い電話はよくあるのでおかしいとも思わなかったが、息を呑んだ感じにフトひっかかるものがあった。

その頃、仕事場では、清水が土を練りながら耕之輔に訊いていた。

「余計なことは言わなかったでしょうね」

「余計なこと……？ ああ、藤波さんのことか」

「本当にあの人の作品を奥さん京都で見たんでしょうか」

耕之輔は阿紀の丹精込めた紬が初子の軀に触れることを思うと我慢ならなかった。

それだけは何としても阻止しなければならぬ。

その時だった。

「先生、先代譲りの上布、何処でしたかしら？ 確か奥の箆笥の二段目でしたよね」

初子が入口の柱に寄って立っていた。

「それがどうした？」

声が震えていた。

「名前を確かめるんですよ。京都で見た草木染めの人と同じかどうか。畳紙にお名前ありませんでした？」

「……知らん」

耕之輔は無視したように仕事を続けていたが突然立ち上がると表に出ていった。

「あの上布がどうしたっていうの？」

訊かれて清水は慌てて口ごもる。

「っ、つまりあの上布はですね。雪晒しって知ってますか」

「雪晒しがどうしたの」

「だから雪晒しに出したんです。古い上布にはそれが一番だそうで」

「そう、何処へ？」

「それが作者にやって貰うのが一番だそうで……」

「藤波あきさんね」

「いえ、その人はもう死んでます」

「じゃ誰に送ったのよ？ 貴方が荷造りしたんでしょ」

「だから、藤波あきさんに」

「なに言ってるのよ、人のこと馬鹿にして」

言うなり初子が出ていった。母屋に戻ったにちがいない。その証拠に間もなく母屋の外線が使われているのが仕事場の電話に表示された。

初子が電話しているのは実家の久美子だった。

「貴女、私に隠してることもあるわね」

「隠してるの？ いろいろあるけどどの口かしら」

「……藤波あきさんて人知ってるわね」

初子としてはカマをかけたつもりだった。

「ああ、そのこと。着物の似合う綺麗な人だったわよ。小千谷から来て上布を持って帰った人でしょ」

「そう。どうして私に隠してたの？」

「別に隠してたわけじゃないけど」

「なぜ隠してたか訊いてるの。私なにもかも知ってるのよ」

「なら私にわざわざ訊くことないでしょ。第一……姉ちゃんに人のことなんか言える資格あるの？」

「どういう意味よ。私がなにをしたって言うのよ？」

「言ってもいいの？ ひっこみつかなくなるんじゃない？」

初子には胸に刺さる一言だった。一瞬ひるむ間に久美子の方から電話は一方的に切れていた。